



南クロフネカンパニー代表

中村 文昭

21歳のとき、独立して始めた飲食店の借金を返し終わった頃ある日ひよっこり僕の店に師匠が来たんです。

「ごうや。お前、儲かってるやろ？」って聞いてくるので、「いやあ思った以上ですよ」と言うと、「そうだろう。俺はお前だったら大丈夫と自信があった。そうか俺の想像以上の速さだな」と言うのです。

それで、「今日はホテル取りますわ」と言ったのです。そしたら「ホテルなんかいらん。お前の部屋に泊まる」って言うんです。

僕はそのとき、商売がどうなるか分からなかったから、1万8千円の長屋みたいな部屋に住んでいました。風呂もないし、トイレも水洗じゃなくて汲み取り式。本当にオンボロ長屋に暮らしていたんですけど、「よかよか、だつて行商していたころ俺たちもそんなところに暮らしていたじゃねえか。気にせんでよか」と言つて、うちに来て、こん

### 「儲かってからが試されときなんやで」

◇3◇

な話をしてくれました。

「お前、よく儲かっていいらしいな。そんだけの速さで借金返したということは、今のお前の小遣いは月120万、130万くらいあるだろう。お前、今からが試され時だぞ。いいかここでお前が成功者ぶつて立派な服を着て、立派な車に乗つて、そこらを遊び回つてつてやり始めてみる。お前の周りに今集まっている人間は見事なくらい離れるぞ、よかか？ 周りの人間はよく見てるんだぞ。そこで儲かって儲からせていただいてるお客さんからいただいているこのお金を、いつ、何に生かすかが問題なんや」



僕、師匠から独立したと言いましたけど、精神的には独立してなかったんです。ずっとその後、心の呪縛が残つていたんです。その師匠にすごい刷り込まれたもの、一つがお金に対する考え方でした。

普通はいくら稼ぐかという、入ってくる金額が成功の証みたいところが

ありますよね。「年収2000万だからすごい」とか「1億だからすごい」とか。

うちの師匠はいつも「稼ぐ金額じゃない。金を何に使うかがその人の値打ちだ」と言う人だったのです。でも、これ本当にそうなんですよ。

お店を出そうと思つたら、意外と簡単に出せると僕は思つています。お店を出したら、友だちが集まつてお祝いしてくれます。応援してくれます。そこからスタートしますよね。

人間、儲かり始めて売り上げが安定してくると、それが当たり前になります。そういうときにだいたい高い車を買うんです。それから衣装がだんだん派手になつて、かわいい彼女をつくつて、うまいもの食べに行つて出勤時間が遅くなる。

そのうち今まで応援してくれた人たちが「あいつ何やってんだ。最近浮足立つてるんじゃないの？」って思うようになつて大切な応援団たちが離れていくんです。そして売り上げが落ちていつて営業できなくなつて店が終わつたつて話いくらでもあります。

(昨年、高鍋西都法人会が主催した講演会にて)